

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1)かんきつ類 の高品質果実 生産対策</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○かんきつ類の高品質果実生産対策 ○中晩柑類の初秋肥施用 ○極早生うんしゅうみかんの収穫 ○かきの収穫 ○かんきつの病虫害防除 ○台風対策 <p>かんきつ類の糖度とクエン酸は9月以降の天候に大きく左右される。降水量が少ないほど糖度は高くなるが、減酸は滞るためかん水管理は重要である。また、9月は台風が発生しやすい時期であるため気象情報には注意する。1か月予報では平年同様に晴れの日が多く、平均気温はかなり高い見込みのため(高松地方气象台8月22日発表)、栽培者自身の体調管理には十分注意する。</p> <p>ア うんしゅうみかん</p> <p>着色が優れ、糖度とクエン酸のバランスがよく、浮皮や腐敗が発生しないことが高品質果実の条件である。園地や樹によって着果量が異なることから、摘果の時期やかん水のタイミングに注意し、M中心の中玉生産と正品率の向上に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○仕上げ摘果 <p>仕上げ摘果は果皮が滑らかで光沢を帯びる頃から始める。着果量が中程度以上の樹では、商品価値の低い果実を除去し、品質の良い下垂した果実を残す。時期と程度は、早生は9月上～下旬(葉果比20)、中晩生は9月中旬～10月上旬(葉果比20～25)とする。軸の太い上向き果は、秋芽の発生を抑えるため、10月以降の樹上選果時に取り除く。また、着果量が少ない樹では、果実肥大を抑えるため樹上選果で対応する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培の実施 <p>シートマルチの設置により、余計な降雨を遮断することで品質向上や着色促進に加えて、浮皮軽減や雨滴の跳ね上げによる腐敗果の軽減にも効果がある。早生うんしゅうみかんや普通うんしゅうみかんでまだ被覆していない園地では、早急に取り組む。なお、過度な土壤乾燥は避けて、葉の巻き具合や肥大等を確認しながら適度なストレス付与に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○浮皮軽減 <p>着色期の高温と多雨により、浮皮の発生が増加する傾向にある。対策として、収穫までにカルシウム剤を20～30日間隔で2～3回散布する。フィガロン乳剤を利用する場合は、蛍尻期(1～2分着色期)とその2週間後(ただし、収穫7日前まで)に2,000～3,000倍液を散布する。また、ジベレリン剤1～2ppmと</p>

項 目	作 業 内 容																																													
<p>(2) 中晩柑類の初秋肥施用</p>	<p>ジャスモメート液剤2,000倍の混用液を収穫予定日の約3か月前に1回散布する。なお、フィガロン乳剤は連用散布すると樹勢低下が心配されるので、樹勢良好な樹に限り使用する。ジベレリン剤とジャスモメート液剤は、着色遅延と果頂部に緑斑が残る場合があるので、初めて使用する際は、指導機関に相談する。</p> <p>イ 中晩柑類</p> <p>不知火やポンカンなどの蒸散量の多い品種では、土壌が乾燥しすぎると酸高になりやすいので土壌の乾燥状態に応じてかん水を行う。また、甘平の裂果軽減には、多頻度かん水が有効である。</p> <p>初秋肥は果実肥大、貯蔵性の向上、樹勢回復等に必要である。時期や量を誤ると十分な効果が得られないので適正に施用する。かん水や軽い中耕により肥効が高まる。</p> <p>表1 中晩柑類の初秋肥施用基準（8月、9月施用分）</p> <table border="1" data-bbox="469 1048 1394 1444"> <thead> <tr> <th rowspan="2">品種名</th> <th rowspan="2">目標収量 (t/10a)</th> <th rowspan="2">施 肥 時 期</th> <th colspan="3">施肥成分量 (kg/10a)</th> </tr> <tr> <th>窒素</th> <th>リン酸</th> <th>カリ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>早生いよかん</td> <td>4.0</td> <td>8月下旬</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>不知火</td> <td>3.0</td> <td>8月下旬</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>ぽんかん</td> <td>3.0</td> <td>8月下旬</td> <td>7</td> <td>5</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>清見</td> <td>3.5</td> <td>9月上旬</td> <td>8</td> <td>7</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>河内晩柑</td> <td>6.5</td> <td>8月下旬</td> <td>8</td> <td>6</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>甘平</td> <td>3.5</td> <td>9月上旬</td> <td>8</td> <td>7</td> <td>7</td> </tr> </tbody> </table> <p>※せとかは清見に準ずる。</p>	品種名	目標収量 (t/10a)	施 肥 時 期	施肥成分量 (kg/10a)			窒素	リン酸	カリ	早生いよかん	4.0	8月下旬	7	6	6	不知火	3.0	8月下旬	7	6	6	ぽんかん	3.0	8月下旬	7	5	6	清見	3.5	9月上旬	8	7	7	河内晩柑	6.5	8月下旬	8	6	6	甘平	3.5	9月上旬	8	7	7
品種名	目標収量 (t/10a)				施 肥 時 期	施肥成分量 (kg/10a)																																								
		窒素	リン酸	カリ																																										
早生いよかん	4.0	8月下旬	7	6	6																																									
不知火	3.0	8月下旬	7	6	6																																									
ぽんかん	3.0	8月下旬	7	5	6																																									
清見	3.5	9月上旬	8	7	7																																									
河内晩柑	6.5	8月下旬	8	6	6																																									
甘平	3.5	9月上旬	8	7	7																																									
<p>(3) 極早生うんしゅうみかんの収穫</p>	<p>極早生うんしゅうみかんでは、9月下旬から収穫が始まるが、事前に果実分析や食味調査を行い、各地区の品質基準をクリアした園地から収穫を行う。また、収穫に当たっては着色の早いものから分割採取を行い、品質を揃える。なお、この時期はまだ気温が高く推移することから、少しの傷でも腐敗しやすくなる。収穫前には殺菌剤を散布するとともに、収穫、運搬、選別作業では果実を丁寧に扱い、傷を付けないよう注意する。</p>																																													
<p>(4) かきの収穫</p>	<p>刀根早生など早生品種の収穫が始まる。かきの糖度は着色との関係が深く、良く着色した果実ほど糖度が高いので、早採りは慎み、十分着色したものから分割採取する。収穫にあたっては、朝露や降雨で果実が濡れた状態で採取すると果面が黒変し</p>																																													

項 目	作 業 内 容
<p>(5)かんきつの 病虫害防除</p>	<p>やすくなることから、果実が乾いてから作業を行う。</p> <p>ア かいよう病 発生が多い園地では、台風の襲来前に、ICボルドー66D 200倍液やムッシュボルドーDF 1,000倍液（炭酸カルシウム剤加用）等を散布して被害の拡大を防ぐ。ただし、高温期の銅剤散布は薬害が発生する可能性がある。風当たりの強い園地では、強風雨による感染を防ぐため、防風垣や防風ネットの整備を行う。また、ミカンハモグリガによる食害痕は病原菌の感染経路となるため、定期的に防除を実施する。</p> <p>イ 黒点病 降雨によって黒点病菌が飛散することから、伝染源である枯れ枝を切除する。薬剤散布の間隔は前回のマンゼブ剤・マンネブ剤の散布から30日以内または200～250 mmの降雨を目安とするが、せとかや河内晩柑などは感受性が高いことから、散布25日以内または150～180mm程度の降雨を目安とする。薬剤はジマンダイセン水和剤600倍液やペンコゼブ水和剤600倍液等を使用する。なお、散布にあたっては、薬剤の使用回数や収穫前日数に注意し、収穫の近い品種ではナティーボフロアブル1,500倍液などを使用する。</p> <p>ウ 褐色腐敗病 土壌中に生息している病原菌が、風雨などによって果実に飛散して感染するため、台風の後には発病が急激に増加することがある。敷きわらやマルチ等で土壌中の病原菌の飛散を防止し、発病果は伝染源となるので除去する。発病後では十分な効果が得られないため、排水不良園などの常発園では、予防的に散布を行う。薬剤は、アリエッティ水和剤400倍液やランマンフロアブル2,000倍液等を使用する。</p> <p>エ ヤガ類 高温少雨となるとヤガの発生が多くなる傾向にある。収穫間近の極早生うんしゅうみかん、果皮の薄い中晩柑類では注意が必要である。</p> <div data-bbox="951 786 1378 1122" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1018 1133 1294 1167">写真1 黒点病被害</p> <div data-bbox="943 1391 1378 1682" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="986 1697 1342 1731">写真2 褐色腐敗病被害</p>

項 目	作 業 内 容
(6) 台風対策	<p>オ カメムシ類</p> <p>カメムシに吸汁加害されると、腐敗の発生や果肉がスポンジ状になり品質低下を招く。薬剤はアルバリン顆粒水溶剤 2,000 倍液等を使用し、収穫前日数など使用基準を遵守する。</p> <p>【事前対策】</p> <p>ほ場や周辺設備等の点検は、川の増水等により人命に危険があるため、必ず風雨が激しくなる前に済ませておき、決して増水中の川や水路に近づかない。</p> <p>○幼木や高接ぎ樹では支柱を立て、風による倒伏や枝折れのないように結束しておく。成木においても添木等による主枝の誘引や枝つりにより、樹木の補強を行う。</p> <p>○棚仕立ての果樹は、棚の補強、新梢の誘引・結束をしておく。施設栽培では、フィルムの押さえや支柱などを補強しておく。</p> <p>○海岸沿いの園地では強風により潮風害の発生が懸念されるので台風通過後の樹上散水に備え、10a当たり 2～3 t 以上の水量の確保や、スプリンクラー施設や停電に備えた発電機の点検を行う。</p> <p>○収穫可能な果実についてはできる限り収穫するが、農薬散布から収穫までの経過日数に注意する。</p> <p>【事後対策】</p> <p>○倒伏した若木や幼木は、根が乾燥しないうちに起こして、支柱を立て結束する。根元が回された樹は、できる限り早く覆土し、支柱を立てる。枝折れが発生した場合は、その基部から切除し、切り口にトップジンMペーストを塗布する。軽い股裂けは、ひもで結束して癒合を促す。</p> <p>○かんきつ、落葉果樹ともに落葉の程度に応じて、見直し摘果を行う。落葉が激しい樹では、全摘果するなど着果を制限して樹勢回復を優先するとともに、主枝・亜主枝の日焼け防止のため、石灰乳等を塗布する。</p> <p>○かんきつ類では台風の強風雨によりかいよう病の多発が心配され、また降雨量が多くなることで黒点病の発生が助長されるため、適切な防除により被害の拡大を防ぐ。</p> <p>○海岸沿いの園地で、強風により潮風害の発生が懸念される場合は、台風通過後、早急に 10 a 当たり 2～3 t 以上の水をスプリンクラー等で樹上散水する。</p> <p>○キウイフルーツでは、強風による落葉で果実に直射日光が当たると空洞果が発生するため、寒冷紗や笠かけによる遮光を行う。</p>

(作成 果樹研究センター)